

“古代人の死”と墨書土器

平川 南

- 一 古代遺跡出土の墨書土器
- 二 古代史料にみえる古代人の冥界
- 三 墨書土器にみえる古代人の死と祈り

論文要旨

さきに拙稿「墨書土器とその字形」において、古代の集落遺跡から出土する墨書土器は、一定の祭祀や儀礼行為等の際に土器になかば記号として意識された文字を記載したのではないかと指摘し、今後、古代村落内の信仰形態の実態を究明しなければならないと課題を提示した。

本稿では、特に千葉県の印旛から香取地方にかけて、近年、著しく資料の増加をみている文章化された墨書土器を素材として、その祭祀や儀礼の具体的内容を明らかにすることを目的とした。

まず、第一には、房総地区を中心として、東日本各地における文章化された墨書土器について、出土遺跡・遺構そして墨書内容等に関する情報を整理してみた。

第二には、これらの墨書内容からは概観するならば、古代の人々が、自らの罪におののき、死を恐れ、必死に延命を願う姿を読みとることができる。

さらに、古代の人々が恐れた冥界は、いうまでもなく、古代中国において形成されたものであるが、我が国にどのような形で受容されていたか、全体的動向をみとめることとした。その結果、古代中国においては、死後の世界に関する中国人の古来の俗説の刺戟によつて触発され、仏教とも道教とも一般信仰ともつかぬ混合した相で現れたものとみられる。

このようにして形成された冥界信仰は、おそらくそのままの形で我が国に受容されたと推測される。「日本霊異記」には、その具体的説話が多数収載されている。

結局のところ、現状でみるかぎり、東日本各地における集落遺跡出土の多数の墨書土器は、古代の人々が、自らの罪によつて冥界に召されることを免れるために、必死で土器に御馳走を盛って供えるいわゆる賄賂(まいない)行為を実施していた姿を伝えたものと理解できるのである。